

ピア・サポート研究会 1999. 1 .30

話題提供者

横浜市立本郷中学校教諭 酒 井 徹
東京大学教育学部附属中・高等学校教諭 大 坪 圭 輔
センター教授 亀 口 憲 治

1 ピア・カウンセリング開始の経緯と問題意識

酒井：

a 開始の経緯

本郷中学は、横浜市にある「平均的な」公立中学校である。現在在籍する約600人の生徒の中には施設で生活する者もいれば、家庭の不和を抱えた生徒もいる。また、最近話題となっているような「むかつく・きれる」生徒達もいないわけではない。だが、大きな荒れがあるわけではなく、ごく普通の「平均的な公立中学校」と言えるであろう。

実践のきっかけは7年前、当時の校長が発した「学校にいじめがある」という宣言に遡る。その頃は大河内君の事件が1～2年前ではあったが、「自分達が気付かない場所で、苦しんでいる子どももいるのではないか」ということから出された宣言であった。その後は地域に根ざした学校を目指して実践が重ねられていくことになる。「いじめがある」といういわば最悪の状況から出発することにはなったが、実践を行う教師の姿や保護者の関心の深さに触発されたのか、やがては生徒の間から「自分達でも何かできないか」との動きが現れてくることになった。

そのような折りに、NHKの「いじめ」をテーマとしたドキュメンタリー番組において本校の実践が紹介され、その番組をきっかけとしてイギリスでピア・カウンセリングを実施している学校と、交流会を持つことになった。交流会の場において、両校の実践の内容がかなり共通することに驚き、「同じことをしていたのか」という生徒の感想も現れたが、そのことは生徒の自信を深めることとなった。その流れの中で、本郷中においてもピア・カウンセリングを実施してはという提案が現れることとなったが、十分な指導が困難であることから教師側が逡巡している折りに、ピア・カウンセリングの日本における紹介者である高橋通子さんから“ピア・サポート”という形での実践形態の提案を受けた。それ以後は”ピア・サ

ポート”という名として実践を行うことになる。昨年の2月末にはカナダのブリティッシュ・コロンビア大学のコール先生を招き、教諭・生徒ともに2日間のワークショップを通じて指導を受け、様々な示唆を受けた。様々な試行錯誤を繰り返しながら、現在のような形の実践に至ったのはこの1・2年のことである。

b 実践上の問題意識—生徒の人間関係の希薄さ

こうした実践に至った背景としては、「生徒の人間関係の希薄さ」に対する問題意識がある。最近子どもが変わった、それは社会が変わったからとかいろいろと原因があげられているが、原因はともかく、生徒同士の人間関係が以前より希薄になってきているように思われることがある。例えば非行と器物損壊事件という観点で見ると、今年度全国の公立中学校で6000件あまりの器物損壊事件が生じているが、事件一件あたりにおいて何人の生徒が関わっているかを縦断的に見てみると、昭和58年には2.91人であったのが、平成9年度は1.09人となり、一つの事件が生じたときに周りにいる生徒が一人、つまりほぼ単独の生徒によって事件が生じるようになってきていることがわかる。昭和58年頃はツッパリグループや番長グループに代表されるような生徒集団による非行がピークとなった時期であり、数人のグループによって事件が生じていたのだが、最近の傾向としては人間関係の希薄さゆえか、非行すら単独でしか行えないとも言える。ただ、それは、裏を返せば集団による支えが薄れたということでもあり、以前ならばガラスを2、3枚も割れば仲間が止めに入っただろうが、最近では一人で廊下の端から端まで割ってしまう。これは、どこで止めたらいいいのか一人では判断がつかないからではないか。また、黒磯で生じたナイフ事件でも、周囲に数人の生徒はいたが誰一人として止めに入ることはなかったと聞く。番長グループが必ずしも良いというわけではないが、生徒の間にもう少し濃密な人間関係が形成されていれば、黒磯の事件もあそこまでの結果には至らなかったのではないだ

ろうか。

このような問題意識を背景として、以前存在したガキ大将のような関係を人工的に形成することは無理であろうが、ある種以前のような密接な人間関係を形成するための援助を少しでも行うことができないうか、ということが実践の動機となっている。最近の生徒達は、自己弁護・自己主張は達者であるが、そのマイナス面として相手の話を聞く時にシャットアウトして自分の周囲に壁を作ってしまう傾向がある。だが話をする際にもっと相手の言葉に耳を傾け、相手の寂しさや悩みを受け取ることができるならば、友人の中でも仲間を得られやすくなるのではないだろうか。また「居場所」が最近のキーワードとなっているが、家族の中の居場所も得やすくなるのではないだろうか。このまま社会に出ていく以前に、別の形の表現をするならば、「コミュニケーションを作る・人間関係を形成する」援助ができないうか、ということが実践の主要な動機である。

また、「生徒が安心して学校で過ごせるようになってほしい」ということも動機の一つである。例えばいじめに関しても生徒の間での人間関係形成能力が高まり、生徒の中にいじめをなくそうという雰囲気が出てくれば、それが大きな歯止めとなる。「何かあってからの指導」ではなく「何かことが起こる前の、予防的な指導」を目指していきたいと思う。

2 東大附属学校の現状について

大坪（附属教官）：先程「生徒が安心して学校に来られるように」という話があったが、現在当校は全般的に生徒が登校したくなくなるような状況はあまり見られず、困った動きもまだ生じてきてはいないと思う。家庭の環境が良いこと、家庭の教育力の高さがその要因であろうが、生徒指導において生徒の自治能力を強く信頼した指導を行っていることもあるのだろう。また一学年の生徒数が120人という中高一貫校であるため、高校に入ると互いの間合いを取ることに自然に慣れてくるという側面もある。グループ学習・テーマ学習などで物事を冷静に見たり、自分を客観的に見たり、周囲の者の存在を意識化したりなどの総合力としての力を養っていることも大きいであろう。

ただ、最近の子どもが抱えざるを得ない人間関係の希薄さを当校の生徒もやはり抱えているように思われる。何かの問題を生徒は抱えているように感じられるが、その正体がなかなか掴みきれないでいるようにも思う。

また、以前より変化したこととしては集団でいる時の状況がある。全体での集会などのとき、以前よりも騒が

しく抑えがきかなくなった。集団の規模が小さい時は共通した話題があるため聞いてくれるが、全体となったときには個々の興味が薄くなるのか聞こうとしない。最近の子どもは情報が多い中で育っているためか、何か音がしている間は自分に必要でないことは聞かない姿勢を身につけているようで、それが全体で話を聞く場面において「聞かない」という現象として現れてくるようである。

3 質疑応答

a 実践の具体的な内容について

亀 口：ロールプレイという言葉は通常の学校教育の文脈の中においては馴染みのない言葉であるが、どのようにしてその意味を伝えているのか。

酒 井：一つは「教えるー習う」という関係ではなく、体験してもらうことを目指すことで伝えやすくしている。また、例として「あなたは3歳の女の子で、目の前に砂山がある。それをガキ大将が崩してしまった。あなたはどうするか。」など、日常にありそうな設定を用いている。逆に言えばそのような日常的な設定でないと伝えるのは難しい。

小野瀬（附属校PTA）：実践の具体的な内容はどのようなものであるか。

酒 井：現在のプログラムに参加しているのは全校生徒600名の中の62名である。いろいろな生徒に来てほしいため参加は希望制としている。いわゆるいい子、いかにもやりそうな子だけではなく茶髪の子やピアスの子も来てくれて、その生徒が元の集団に戻ったときに周囲の子が、その子がいることでほっとできるようになってくれると良いと考えている。時間は一回あたり1～2時間である。

プログラム全体としては8回の講習で終了する。初めの1・2回は仲間作りのためのグループワークを行う。仲間が力を合わせないと解決が不可能なゲームを行い、仲間作りのためのトレーニングをする。3回目は他者とコミュニケーションすることの大切さ、言葉の大切さについて学ぶ。4回はロールプレイの開始である。続けて5・6・7回は相手にどれだけ多く語ってもらうか、どれだけ多くの会話を引き出すことができるかを体験する。8回目の前半には先にふれたコール先生が紹介された“問題を把握するための5つのステップ”を伝え、それを意識してロールプレイを行うように勧める。そして8回目の後半には生徒にもう何も要求はせず生徒に任せている。

全体としては、語られた出来事や字面だけを追う

のでもなく、その奥にある感情、言葉を発する時の思いを捉えていくことを目指している。

ピア・サポートを行っている部屋に行くとはっとすると語る生徒も多い。ピアスの子も茶髪の子もあり、「教室では話せないことがここでは話せる」と語る生徒もいる。教室以外の空間であり、様々な生徒が混じりやすいことが居心地の良さを作りだしているようである。

b ピア・サポート実践の成果

亀 口：実践の効果や生徒の感想についてはどうであろうか。

酒 井：参加した27人（ピア・サポートは順位性の低い活動であり、生徒会活動などがあればそちらが優先されるため60人より少ない人数となる。）に自由記述で感想を尋ねたところ、27人中24名が「成果があった」と語った。「聞き方が変わった」が11名、「話し方が変わった」が10名、「相手を思いやるなど心が変わった」が10名である。

個別の感想を二つ挙げる。

・2年生男子

「ピア・サポートで良かったのは、話される時の態度がいかに大切であるかということを知ったことです。これまでは決まった人としか話せなかったのに、今年は友達が増え、いろいろな人と話すことができるようになりました。全校がこうなると良いと思います。」

・2年生女子

「ピア・サポート委員に入ろうと思ったのは、いつも人に頼るばかりだった私に相談してきた人がいたからです。それは委員の募集の前のことでしたが、友達から無視されているという相談でした。私も同じようなことをされた経験があって、『こうするとなくなるよ』と言ったのですが、結果として相手を困らせてしまいました。ピア・サポートに入ってから人の見かけや外見だけで判断をしてはいけないことがわかりました。人に頼られることの大変さもわかりました。この委員会に入って、自分の意見が素直に言えるようになったと感じています。たくさん人の気持ちをゆっくりゆっくりかもしれないが考えられるように頑張ります。私はピアに入ってから、自分に少し自信が持てるようになったと感じています。それに強くなったような気がします。ありがとうございました。」

「話し方がわかると他の生徒とも話せるように

なった」ということが多く語られる。「人と人の間に自信がなかったのが、ピア・サポートによって自信が持てるようになった」という。このように関係形成への自信を得られることが最も大きな成果となっているようである。

c その他

三 橋(附属教官)：補習をする時、呼びかけると目当ての子が来ないことがあるが、このような実践を行った場合、本当に問題を抱えている子は却って来にくい傾向があるように思う。担任としては全員に参加してほしいと思うが、このような問題についてはどう対処なさっているか。

酒 井：8回続けて出席しなくとも1回だけの参加でも良いとして、敷居を低くするように心掛けている。1回参加した後居ついてしまった子もいる。

小野瀬：先程「関係に対する自信ができる」というお話があったが、それは自分の話を相手が聞いてくれる時間が保証されているという安心感から生じるのか、それとも聞く技術、スキルを獲得することによるのか。

酒 井：技術の指導というよりは自己理解のための援助を行うよう努めているので、必ずしも技術面だけではないと思われる。だが、生徒の自信が上のどちらによって生じているのかはまだよくわからない。

4 おわりに 東大教官の側から

亀 口：常々学校におけるカウンセリングを考える際に連携という言葉が鍵となると考えていたが、今回伺った実践は、海外にも目を開かれ連携を行った素晴らしい実践であると感じた。ピア・カウンセリングの実践は、ただ外国で行われている実践を直輸入すると言うものではなく、それぞれの学校の事情を考慮したものとなろう。それぞれの思いのたけを形としていき、その共通部分を確かめていくという作業が必要になっていくだろう。先日、亀口・堀田でピア・カウンセリングに関する論文を作成し、現在も続けてピア・カウンセリングに関する文献の収集に当たっている。互いに情報、資料などを提供していければ良いと思っている。具体的に今まで収集した情報の中で、関わるものを堀田さんに紹介して頂く。

堀 田：ピア・サポートは様々な形で実施されているが、主に二つの形態があるようである。一つは選出された生徒がカウンセラーの役割を取り他生徒の相談に

当たる“ピア・カウンセリング”の形態であり、もう一つは生徒が対等の関係で互いに話をする“コ・カウンセリング”の形態である。今回紹介して下さった実践の中には二つの形態がともにそれぞれ存在しているように思われる。また、先程対象としたい生徒が現れないという問題が指摘されたが、カウンセリングの支援対象となりそうな生徒を却ってピア・カウンセラーとして指名してしまうというような実

践も行われている。

また、別の形態として“コンフリクト・マネジメント”プログラムという形態も存在している。コンフリクト・マネージャーとして選ばれた生徒が腕章をして校内におり、葛藤場面の調停・解決に携わるというものである。主にアメリカでは多く行われているようである。